

# 浄誓寺(幸手市神明内)の首塚について

tozsun文責

平将門と藤原秀郷・平貞盛連合軍の戦いは、一ノ谷(茨城県境町)合戦で藤原秀郷・平貞盛連合軍が勝利した後、7km(利根川がなければ下記の地図のように近場となる)離れた幸手市神明内で最後の戦いがあり、そこで平将門が討ち死にする。その際切られた将門の首を家来が持ち去りそこに首塚を作り埋葬したと伝わっている。



その周辺の木立村(公達村)に将門の家来が住み着き浄誓寺を守ってきたという。神明内は、権現堂川村の村役場があった場所で、合併で幸手市となった。なお、権現堂堤のそばの熊野権現神社は将門の守り神である。ここから権現堂の名前が生じたと思われる。

なお、一ノ谷から神明内までは当時(1000年前)7kmあまりで、大きな川もなかった。利根川の開削による場所を検討すると、利根川の両側に同じ地名が5箇所(新田戸、桐ヶ作、古布内、木間ヶ瀬、小山)見られる。江戸時代より前は同じ村であったのだろう。一ノ谷から神明内までは、この5つの村を直線で横切るので、当時は騎馬で駆け抜けることが可能であったと思われる。



なお、大きな川として当時流れていたのは、利根川(会の川→葛西用水路→大落古利根川)と考えられる。この川は幸手市の西側を流れていたことになる。この川の東側が杉戸町(下総国葛飾郡)で、川の西側が宮代町(武蔵国埼玉郡)だったので、平将門の守備範囲として幸手や杉戸が含まれていたようだ。その杉戸町下高野に永福寺が建てられている。この永福寺は「どじょう施餓鬼」の寺として有名だが、焼け落ちた永福寺を942年に第14世に襲名し再建した抜山優婆塞は、平将門の子と言われており、滅んだ将門軍を弔ったと思われる。

幸手の権現堂の先に内国府間(うちごうま)と外国府間があるが、不思議な地名である。ある人が調べたところによると、八王子市にある武蔵国府と市川市にある下総国府と栃木県下野市にある下野国府を結んだ古代の街道の分岐点にあたるようだ。外国府間から下野国府までは直線距離で32km、外国府間から下総国府までは43km、外国府間から武蔵国府までは51kmあったので、約3:4:5になる。将門が下野と下総の国府の間を馬で駆け抜けた様子が目に浮かぶ。

江戸時代より前の歴史は、川の歴史を知った上で検討する必要があることを痛感した。